

エコファーマーネットワーク通信

〈No.5〉



☆東日本大震災や福島第一原子力発電所事故による悲惨な大災害からの一日も早い復興を祈念し新年を迎えました。放射性物質による影響は、福島県産の米の一部で基準値を超えるものが出て出荷停止などが行われるなど厳しい状況にあります。国の津波等による被災農地の生産力復活や販売力回復に向けた支援や放射能物質の吸収抑制対策が早急に実施され一日も早い復旧・復興が進むことを願っております。

☆前号のエコファーマーネットワーク通信で紹介しました活動計画の結果を紹介します。23年11月29日(火)には、静岡県三島市でエコファーマーネットワーク会員の農場を会場として、「エコファーマーネットワーク現地交流会(in静岡)」を開催し、消費者・流通関係者等をはじめ50名近い参加者があり、エコファーマー制度や当該農家の取組について学んだあと、収穫体験等を通じて活発な交流となりました。

☆また、23年12月13日(火)には、福井県福井市で「環境にやさしい売れる米づくりを目指して」をテーマとして、「全国エコファーマーネットワーク研究会(in福井)」を開催し、140名近い参加者がありました。研究会では、「安全・安心・食味にこだわる技術・経営戦略」、「エコファーマー集団による「蛍米」のブランド化」、「地域を挙げた売れる米づくりへの挑戦」と題したエコファーマーの皆様の事例発表があり、その後の意見交換会では、売れる米づくりには「安全・安心はあたりまえであり、食味の高位平準化」にどう対処するかなど、活発な

意見交換が行われました。

☆さらに、24年1月12日(木)~13日(金)には、埼玉県熊谷市、深谷市、小川町で、当ネットワークの最大行事である「全国エコファーマー全国交流会・現地検討会」を開催しました。また、12日にはネットワーク化フォーラムを、13日(金)には現地研究会を深谷市コース(埼玉産直センター等見学)、小川町コース(有機栽培等見学)に分かれて行いました。

☆なお、平成21年度から本年度までの3カ年間実施されてきましたエコファーマーネットワーク整備事業は本年度で終了となります。このため、今後の活動は会費よっての運営が必要であり、当ネットワーク会員の加入促進が不可欠です。会員の皆様におかれましても、地域で開催されるエコファーマー達のイベント等でネットワークのパンフレットの配布をして頂き、また、お知り合いの方にお声がけをして頂いて、我が国農業が環境と調和した持続可能な農業として国民の支持を得られるよう、環境保全型農業を育てるネットワーク会員の拡大にご協力をお願いします。

☆今回の通信では、23年10月31日(月)~11月4日(金)(11月3日は休み)まで、農水省「消費者の部屋」での特別展示「環境に貢献するエコファーマーの活動」の結果と、23年2月に愛媛県松山市で開催された「エコファーマーネットワーク研究会(in愛媛)」での基調講演内容の概要を掲載しましたのでご覧ください。

〈全国エコファーマーネットワーク事務局〉

農林水産省「消費者の部屋」でのエコファーマー活動に関する展示の結果

☆平成23年10月31日～11月4日に消費者の部屋において、「環境保全に貢献するエコファーマー活動」の特別展示を行いました。お昼どきを中心に多くの方に来場頂き、初日の10月31日は昼12時から17時までの展示に328名、11月1～2日は10時～17時の展示に2日間で439名、最終日の11月4日は10時～13時の展示に129名の来場者があり、4日間の来場者数は896人となりました。

☆展示内容は、エコファーマーネットワークの紹介やエコファーマーの活動状況のパネル展示のほか、エコファーマーの作った農産物の展示、加工品の展示を行いました。また、生物多様性のコーナーとして展示を行ったカイエビ^{注)}には来場者の多くが関心を寄せていました。エコファーマーの方々は初日を中心に参加され、活動状況のパネルや農産物の説明、試飲・試食等のお手伝いを頂きました(下記、11月1日の日本農業新聞にも内容が掲載されました)。

☆来場者にはエコファーマーの作った農産物の試食・試飲、配布を行うとともに、アンケートも行いました。農産物やパンフレッ



多くの来場者での賑わう室内(10月31日)

トの配布は、来場者本人だけでなく、家庭に持ち帰り頂き、家族・知人等とエコファーマーについて関心を深めて頂ける機会になったと思います。

☆なお、来場者からは「エコファーマーの安全・安心の取組と努力、苦労がわかった」、「自然と一体となった環境保全型農業の取組が理解できた」、「エコファーマーの農産物から作った加工品がどこで買えるのか知りたい」など多数の意見が寄せられました。

注) カイエビ:水田で見られる二枚貝に似た小型の甲殻類。大きさは数ミリから1cm程度。



▲農産物の展示状況

平成23年11月1日・日本農業新聞への掲載記事▶

全国エコ農水省で初の開催

「消費者の部屋」に出展した全国エコファーマーネットワークの会員(31日、東京・農が関の農水省で)

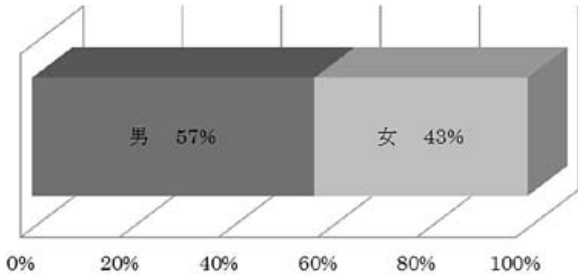
東京・農が関の農水省「全型農業に取り組み農家からエコファーマー展が肥料・農薬を減らして栽培した米、ミニトマト、

ミカン、小松菜などの農産物、加工品その他、田んぼで採取したカイエビなど生き物も展示している。4日まで。

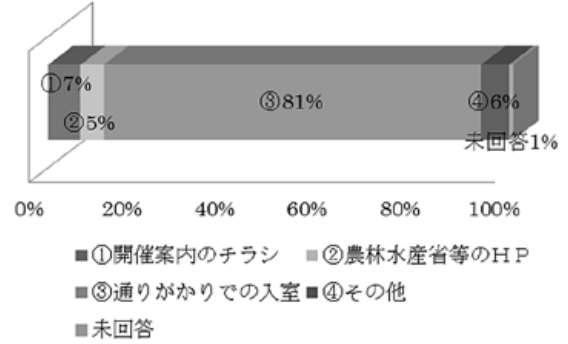
知事の認定を受けたエコファーマーは、今年3月末で21万人と年々増えている。昨年は全国エコファーマーネットワークが結成され、各地で土づくりや減農薬技術の研修会を開き、交流を深めている。ネットワークの佐々木陽悦会長は「初めての展示で市民権を得るきっかけになる。会員を増やして消費者への理解も進めていきたい」と話した。

消費者の部屋「環境保全に貢献するエコファーマー活動」アンケート結果

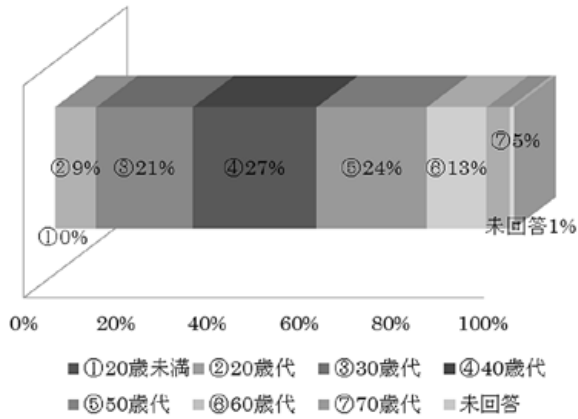
来室者の性別



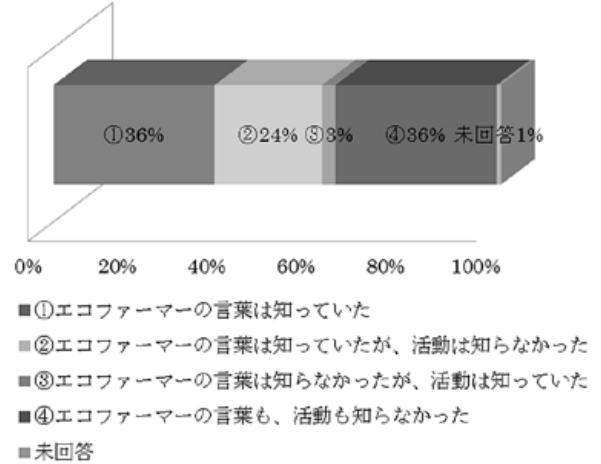
展示を知ったきっかけ



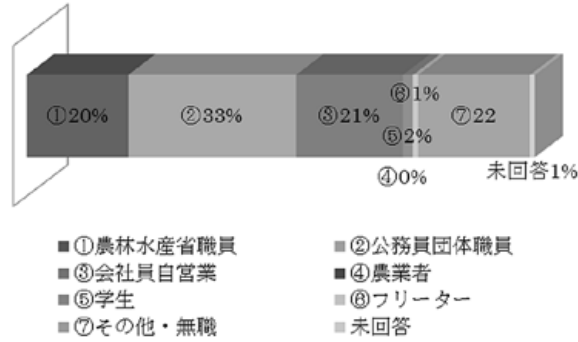
来室者の年齢



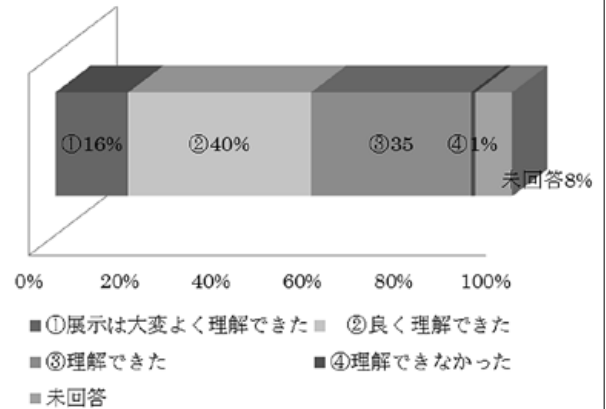
エコファーマーと活動の認知度



来室者の職業



展示内容の理解度



参考：農林水産省のホームページ（HP）での紹介

◆ 特別展示 環境に貢献するエコファーマーの活動 ◆

開催日：平成23年10月31日～11月2日、11月4日 4日間開催

来場者：896人

内 容：環境にやさしい農業を推進する政策や、エコファーマー達が実践している技術とそれによって生産されている農産物と加工品等を紹介しました。エコファーマーが相互に交流し研鑽する組織として誕生した「全国エコファーマーネットワーク」の活動も紹介しました。

*エコファーマーとは、「持続農業法」に基づき土づくりと化学肥料・化学合成農薬の使用低減に一体的に取り組む計画を立て、都道府県知事の認定を受けた農業者の愛称です。



エコファーマーに関するパネルやパンフレットを展示



日本各地のエコファーマーの取組事例の紹介と農産物の展示を行いました。



エコファーマーが生産した農産物や農産加工品の試食・試飲を実施



田んぼの生き物を観察するコーナー



—ご来場ありがとうございました—

西南暖地での 持続型水田農業経営の推進

有限会社ジェイ・ウィングファーム 代表取締役社長
日本ブランド農業事業協同組合 代表理事理事長
牧 秀 宣

農業や環境の持続性ということ

“持続型水田農業経営”というタイトルにしていますが、はるか太古の時代から持続しているから今があり、古代から戦争やまつりごとがある中で重要だから食料生産部門が残ってきたのです。環境は一人で守れるものでもなく、また農業者だけで守るべきものではなく、いろんな意味があると思います。

私が農業をやり始めた時代は、農業はあまり要らんという時代です。その時代に農業をやると言うときと変わり者という時代でした。今は農業外の人でも農業の重要性が分かりはじめています。しかし、農業に関心が出てきた時には担い手がいないのが現実です。それは急に来たわけではなく数十年前からじわじわ来ているので、それに気付かなかったのです。

環境にしてもしかりです。例えば、海外に行かれてすごいなあと思うのは、昔は建物や列車や車でしたが、今は農村風景がきれいなことに憧れる。それを今、自分の足元を見た時に、農村の風景がきれいと思える場所がどのくらいあるかです。それが僕は環境だと思います。誰がやるか、どこがやるかではなく、今は本当にまともでないところまで来ています。農業者が集まり、或いは都会の文化人などが集まって環境問題を取り上げていますが、ばらばらです。この辺を直さなければというところへ来ています。それは一

緒にやるべき問題で、断片的に作ったり直してもダメです。将来、何十年後までも使えるものじゃないと意味がない。我々がここ数十年の間に、ほとんど崩してきたことに気付いたがもう遅い。例えば、段々畑と簡単に言うが、今の人に化石燃料を使わずコツコツ作りましょうなどと言ったら、もうそれで引いてしまいます。段々畑は何年かかって出来、その段々畑にミカンがある前は何が植わっていたかを理解しないで、農業がすばらしいとか言っているとえらいことになります。これが今だと思います。

米麦経営で地域を守る覚悟

私が米とムギの栽培を始めたのは、米とムギが一番古い作物で、これを作っていれば何とかなるくらいの軽い気持ちからです。しかし、経済環境の変化から30年前には大体農家だったが農業を止める人が続出し、家や工場が建ち農業をやる環境ではなくなった。その結果、もみ殻を焼く煙が煙い、トラクターの音がやかましい、刈払機もうるさいという中で今農業をしてるわけです。

その環境にどう対処するかと言えば、現場の者がやるしかない。ほぼ壊滅状態の中で今から元へ戻していくのですが、非常にエネルギーが要ります。昔段々畑を造ったぐらいのエネルギーがないとできない。これは、地域で理解され、話し合いができてはじめて可能です。テレビや新聞には農業の悪いことが沢山出てくる一方で、農業は本当に自然でいい、空気がきれいで体にもいいと言いますが、これじゃあやれんのです。生産性が上がって、はじめて続くのです。皆さんの子供さんが今の状態で農業をするとすると、「やめとき、あんた儲けもないのに食べていけんで」と言いますね。何でそう言わなければいけな

いのかを考えてみてほしいのです。もう理屈も何もない、農家がいなくなったので石を積もうにも人がいない。これも環境の一つですから。その環境をどのように考えていくか、これは全部皆さん方の肩に掛かっています。

私が何で農業をやっているかと言えば、わしが守らにゃあ誰が守るのかという“粋がり”なんです。そこに賛同する人が来て、できたのが「有限会社 ジェイ・ウィングファーム」という会社です。会社を作るぞと言って作ったわけじゃない。こうしようかなと思っただけです。そこに来た若者に定着してもらえるかどうかは今からです。その若者がどこを見て継続するかと言えば環境です。例えば、小さなことかも知れないが、ちょっと行ったら映画も見れるとか、近くにコンビニもあることを求めて来ている子もいれば、コンビニなんか要らん、できるだけ何もない方がいいと思う人もいて、九州の山中に行こうとか考えるわけです。いろんな環境を考え、そこでやるかどうかは本人が決めることです。

環境を的確に捉え経営を持続させる

こういうことが全国的に起きているのに、見て見んふりをしてきて問題が大きくなってきた。見て見んふりをしているのはいかんことです。そういうすべての面が環境であるということを、皆さん方に理解してほしいのです。ただ単に、農地がどうこうとか、トンボが飛んだが環境じゃないんです。イノシシが来た、シカが来た、鳥が来たと言ってニュースになっているが、これは当たり前のことなのに、それをニュースと捉える人が多過ぎる。これもマスコミという環境の変化です。

持続型という、妙にいろんなことが出てくるが、簡単に言うと続けていくことです。米、ムギを作り続けたいと思うので、米が

余った、足らんとか周りの人が分析して数字を挙げたところで気にすることはない。今、マスコミで穀物が上下したとって一喜一憂していますが、自分の足元をじっと見とった方がいいのです。米、ムギは西南暖地であれば、大体どこでもできます。としたら、まだ環境が残っているということです。残っているうちに、これ以上減ったらまずいということを思うかどうかは今です。皆さん方が減すことも、止めることもできる。私の場合は、自分の集落から西を見ると電線がない水田が広がっていたので、ここは当分残ると単純に考え、そこを拠点に活動を始めたのです。そしてたら農業を止める人が続出し、僕らは大型農業機械を買い仕事をしているので、採算をとるために借地を増やしていきます。

環境条件を活かし経営規模を拡大

私のいる東温市は地形的には中間地から山間部に入っていく所です。集落から3~4km上がっていくと、水田の形状が違ってきます。私の周辺の水田は、昔は全部コンクリート畦畔の四角い田圃に整備されており、当時は便利だと思っていました。この田圃も50年たったらコンクリートが壊れてきますが、これを再びコンクリートで仕上げると田圃が買える程お金がかかるので、土の畦畔に戻すことにした。このように、便利と不便とが短いスパンと長いスパンで変わってくる。中山間地に入っていくと、等高線状になったウナギの寝床みたいな田圃ばかりですが、借地なので手間は要るが文句は言えない。田植機で真っすぐ植えるのは苦勞するが畦畔が曲がっていればうまく見えるので、最近はこの方がいいのでは時々思います。

嬉しいことに、この道後平野は非常に肥沃で、努力なしに米もムギもよく採れる。こ

ういう環境と気候のお陰で年2回の作物ができ、冬場も仕事ができる。

当初、私は米麦経営は半年働き半年寝て暮らせると思っていたが、半年間遊ぶにはお金が不足するし、道後平野では1年中仕事ができることも知った。温暖なためハウスでなくても露地野菜が作れ、これを経営の発展につなげた。自分の場所の条件に興味湧き、それを利用した。

農地が余ってくることも環境です。私達の所は松山市に近い兼業地帯で、高齢化が進み農地の維持が困難になるのが早い環境のため農地を集積し、現在の経営規模は100haを超えた。これは自分の意図ではなく、そういう環境を受け入れ受委託や借地が広がっていったのです。60年前には人に土地を貸すのはとんでもない時代でしたが、農地を持って逃げない人がいないことが分かり、そこに法律の改正も大きく影響し賃貸借が増加した。しかし、本音は誰が作ってくれるかです。それが10年、20年続くと水や空気と同じになって、普通のことになってきた。しかし、最近急激に高齢化が進み、また農産物価格が下がり始めたため、借地が間に合わない程農地が余り、それが遊休農地になって出てきたわけです。

地域の環境を良くし適地適産で

良く「ピンチはチャンスだ」と言う人がいます。しかし、チャンスもピンチもないのです。みな自分のことですから、そこに目を向けてほしい。これからは、誰が地域を守るなんていうおこがましいことではなく、その地域を少しでもきれいに見せていくことが、農業だけでなく必要になってきます。私達も必要に応じハウスを使いますが、ハウス園芸をしている人のハウスには違和感がある。ビ

ニールが破れてバタバタしていることが多い。あれも何とかしたいと思うような今の私の周りの風景です。私達が自分で倉庫を建てたりハウスを建てて、自分で自分の環境を壊しているのは何とかしたいと思います。最終的には、自分で自分の首を絞めていったのがここ50年かなと思います。で、こりゃ危ないなと気づき、それが環境などの言葉となって現れたのです。これは、ものすごく良いことです。本当に環境を整えば、害虫や病気も出方も変わってきます。皆が昔のように圃場を管理して、思い付きで作物を植えるのではなくて、バランスを取って作付けしていくことが大事です。

米にしても、北海道は別として、日本全国、同一品種になり、野菜も同一品種を沢山作るので、日本全国どこも食べるものが同じで値段も下がる。それで、地産地消と言いはじめている。地元の野菜が消えかけている。何とかせんといかんと種を探そうにも、農林水産省にお願いしなければならないようなことになっている。かろうじて持っていた種子を使い、地元の野菜が少し出て来ましたが、これが高級品ということになり、それを私の所でもと作りだし、また繰り返す。意味のないことを数十年やってきた。

種子の問題も環境の問題です。環境に適応した種子を使っているか、環境に適応した作物を選んでいるかも考え直す必要がある。しかし、その種子がない。ほとんどの野菜がF1になり1回しか使えない。その種を買って、良い野菜が出来たと言ったって、種を作った所が儲けるだけなのに、それに気付かない。こういう何をか言わんやの世界に我々はいるわけです。

効率化を追求して持続性を無くす愚

ぜひ考え直してもらいたいのは、食べ物を作る地域の環境です。その地域の環境がどうしたら残るかですが、もともと日本は米の文化ですから、水田を大切にしていけることが一番いいのです。多くの有識者が水田の機能について沢山論じているが、現実に使ってる人が一番分かっている。水田は人間が造った最高に効率のいい土地ですから、そこをどう維持して作物を作っていくかに尽きる。畑作は畑作で持続していかなくてはいけないので、考えるべきことは一杯ある。これもお互いが情報交換すりゃあ知恵が出し合えるんですが、畑作と水稲と割ってしまうと分からなくなる。

私の所は冬は畑作、夏は稲作をしている。それは人が言うから僕も言うだけで、畑作と水稲と言って分けたことはない。たまたま乾いて畑になっているから畑作と言うんですが、それを素直に受け取って使っていくことが本来のシステムだと思う。しかし、システムという横文字の言葉は、どういうわけか効率の悪いものは排除していくというイメージがついてまわるが、便利さとか融通性という点では、昔の方がはるかに効率がいいと思う。

効率とは何かですが、効率を良くして20年で潰れた所が大部あります。それは、結果的に効率が悪かったということです。

僕は、非効率でもいいから、ずーっと続かなければいかんと思います。ずーっと続くということは、ロングヒット商品です。そのロングヒット商品を作ることはなかなか難しい。しかし現に、周りにロングヒット商品はあるが、どこにでもあるので、自分の所にあるものは新しいものじゃないと思い、なくしていく。で、隣の芝生が青く見え、青いも

のを引っ張ってきたが、気付いてみたら数年したら駄目になったというものが一杯あります。是非、身の回りを見直してもらいたい。

いくら古くても、良いものは良いということのを頭に置いてほしい。そうじゃないと、この研究会に来ているほとんどの方があまりよくない人ばかりになっていく。古いものは要らん、新しいものがないぞと言ったらどうにもならんのです。

古いことを捨て非効率化、無駄を助長している

若い人は知らない私流の“うば捨て山”の話をして。ある時、ある殿様が「もう年寄りには要らんから、全部山へ置いてこい」と命令し、皆年寄りを山に置きに行った。ある若者は、連れていったけど気になって帰ってきた。年寄りが皆居なくなった時に殿様から難題が来た。その一つは「灰の縄」を持ってこいと言う。その若者は灰の縄はどうしたら作れるか、縄だと結べないといかんとか考えた。その若者は殿様の言ったことに逆らうと打ち首になるかもしれないが、ご禁制を犯せばあちゃんに灰の縄の作り方を聞きに行った。そうしたら「石でも何でも構わん、鉄の上へ置いて下から火を炊いて焼いたら、その上に灰が残ろう。それ持っていけばいい」と言われ、お城に持っていった。そしたら、殿様が「どうしたんだ」って言うので、「私の知恵です」言えばいいのに正直に言うた。そしたら殿様が「うーん、そうか。わしがやったことは間違っていたな」となり、うば捨て山のばあちゃんを下へ下ろした。

今の世の中、これに似ている。すべて“効率”という言葉にごまかされてきた。“効率がいい”ってどういうことかと考えれば、もっとヒントが出ます。

私は米とムギを作っているのですが、米粉やムギの粉もひきますが、非効率な方法の方がいいと思い、能率の低い臼で引きます。大量生産の必要がないからですが、粉を使った人はこの方がいいと言います。1時間に何十トンという装置もあるが、ばあちゃんがグルグル回す石臼が今は要ります。しかし、石臼と簡単に言うが、石臼の管理ができる人がいず、道具を維持できない。使ったら使いつ放しという問題もあります。

最近、農商工連携がはやりですが、数十年前はみな農商工連携だった。小さな村、町に作る場所があり、そこが売買する場所でもあった。しかし、品物が揃っていなかったり、期限切れのものがあるのではないと言われていたりして、見掛けの良い店ができたなら皆そちらへ行ってしまった。しかし今、地方都会では空洞化でショッピング街も無くなり年寄りや買い物バスを出すという。何が便利か不便なのか分からない。

農商工連携という言葉も、インパクトがあるので作ったのですが、皆さん方が捨てたものです。石臼にしても、それを造る人、管理する人、修理する人が要るし、その石を見分ける人がいる。そして、本当に非効率になってきた。ここに目を向けて下さい。

物の見方・発想の仕方が重要

皆さん“もったいない”という言葉は知っているといます。例えばミカンを食べる人は、ミカンの皮を剥いてはせっせと捨てていますが、実は、中よりも外の方がよかったという品物があるでしょう。皮の方が商品化できる。中を食べておいしいと言う場合じゃない。全部使うことはエコと言えますね。

また、あまりテレビや新聞は見ない方がいいかもしれん。そればかり見ていると、皆と

同じになってしまい特徴がなくなる。しかしテレビも見方です。僕が見るのはコマーシャルの方です。番組の中身は大したことないが、コマーシャルはものすごくいいことを言います。それが正しいかどうかは別ですが、そこを見るんです。タイミングよくコマーシャルが出てくる。要するに、テレビも見方を一つ間違えるとダメです。

そういうとらえ方が重要で、農業だから農業の中だけで考えることはやめてほしいと思います。農業に関連した土、植物、水は我々だけのものではなく、いろんなところが関係している。それで、農業者がうまいこと使わないといけないと思うのは、例えば、どこそこの会社が、たまに、タヌキが石を投げたぐらい山に植林しましたとか、「エコに協力してます」って言われて、黙っとったらいかんと思います。農業を毎日やっている人はどうなるんですか。水田に田植えをするが誰も言わん。ここら辺から変えていくと面白いですよ。

水田農業は世界に誇れます。何十年、何百年、同一作物を作り続けるのはすごいことです。そういう高度な知恵を皆さんは持った上で農業をやっているのですから、どこかの会社が10年に1回、3年に1回やったことの方が全国の人に知られているというのはおかしい。

そういう考え方にたって、農業者が作物を作って消費者に持っていくのが商品のアピールです。そうしないと、全国的に担い手がいなくて農業は続きません。一つの環境循環サイクルが狂ったらおかしくなる。人がいないということも、サイクルが狂いはじめていることですから、そのサイクルを狂わさないようにするのが、これから重要です。

話が横道にそれましたが、実は全部関連し

ています。“経営者”と言うのもおこがましいですが、一つの仕事をする人は、その部分をちゃんと持っておかないと商品に力がなくなる。皆さんは原料でなく商品を作っているわけですから。それに力をつけてはじめて、経済的に少しはよくなり、持続していく。持続させることによって、結果として、何々農法、何々式が出てくるんです。自分に合わなかったらやめたらいい。選んだのは自分ですから。これは水田作であろうと柑橘作、野菜作であろうと同じです。

地域の環境を守り育てる 農業者の役割

とりとめもない話をしましたが、帰ったら自分の周り見て下さい。やっぱりここはきれいだなあという所は大事にして下さい。あそこの看板は要らないというのがあれば、それは除いたらいいのです。そうすると、本当にきれいになり、また住んでみようかとなる。そこからスタートすることが一番です。

僕は、ムギが冬に青々と茂ってるのが気持ちいいんです。「そんなこと言ったって、飯食えまいがな」と言われても、飯が食える食えんは自分の勝手です。きれいなことは気持ちがいい。僕もまだ気分的には若いので、米とムギではムギが好きです。ピシッと立ち何があっても絶対首曲げんが、死ぬときにはカクンと折れるのが好きです。しかしあと20年程したら、「こうべを垂れてこそ」いうかも知れません。それはそれでまたいいですよ。

皆さん方が今いろんなことに取り組まれて

いることは、世のためになってることですから、世のためになることが続かないという社会はこっちから願い下げであって、続く社会ができるかできんかは、我々一人一人にかかると思います。

我々は水田が皆さん方の目の前にある間は、何とか環境も守っていけると思うし、それに準じていろんなものが出てきますが、それを守って行ってこそ、初めて次の段階へ行けるので、ぜひこれ以上荒れ地ができんようにしたいと思います。しかし、動物もおりますから、一部分は残しておく。それは環境保全の一部だと思うので、そういうふうな、ちょっと目線を変えたやり方も考えてエコ農業を進めるため、力つけて頂きたいと思います。

余談になりますが、僕は農村環境問題に関心を持っていますが、実は重信川の南の方に行くと、トンボが増えています。皆さん方の意識が高くなって残る環境になっているのです。また、土地改良区に関わっており、ある所の水路の補修をしようとしたら、今まで見なかったシジミ貝が沢山出てきましたが、これもいろんな声掛けが形になって出てきたのです。

我々も好き放題なことをやらないように気を付けていけばすごいことが起きるのです。皆さん方も是非地域、農業だけじゃなく、いろんなことに目を向け環境を守ってくれたら、エコというものがもっと広がっていくので、よろしくお願いします。